京都大学



学術フォーラム 「学術振興に寄与する研究評価を目指して」

コメント:研究支援の立場から

2020年8月29日

京都大学 学術研究支援室 (KURA)

稲石 奈津子

人社系研究の**研究評価に関する** 京大人社系URAの取り組み

- 1. 議論の場作り、ネットワーキング
 - 2. 国内外の動向調査、情報提供

研究と研究者にとって発展につながる評価とは何か

URA間での研究評価に関する情報共有

人文・社会科学系研究推進フォーラムとは?

人社系の研究にかかわる研究者やURA、事務系職員がより良い研究推進のあり方をとも に議論し、ともに行動することを目指して、2014年に発足。フォーラムの企画・運営は、 開催校を中心に、各大学の人社系担当URAの有志グループによって行われている。

人文・社会科学系研究推進フォーラム開始

2014

2015

2016

研究評価がテーマの企画

2017

2018

2019

2020

人社系フォーラム 運営ネットワーク校

大阪大学・京都大学・筑波大学・ 琉球大学・早稲田大学・北海道 大学・横浜国立大学・中央大学 *2020年8月現在、上記の8校が参画

JINSHA情報共有会

人社系フォーラムのスピンオフ 企画。研究支援者間の情報共有を 促すための中規模の会合

KYOTO UNIVERSITY

2014.12 第1回(大阪大学)人文・社会科学研究推進に必要な共通基盤整備を考えよう

2016.3 第2回(筑波大学)人文・社会科学研究推進の三手先を考える

- 2017.3 第3回(琉球大学)地域と共に新しい "ジンブン"力を創造する人社系研究の展開
 - 2017.6 第1回 (京都大学) JINSHA
 - 2017.9 第2回(早稲田大学)JINSHA
 - 2017.12 第3回(筑波大学)JINSHA
- 2018.3 第4回(京都大学)人文・社会科学系研究の未来像を描く ー研究の発展につながる評価とは
- 2018.6 第4回(大阪大学) JINSHA
 - 2018.9 第5回 (琉球大学) JINSHA
- 2019.3 第5回(早稲田大学)人文・社会科学系研究を振興するファンドとその支援 ーこれからの社会を共創する人社系研究のために
 - 2019.7 第6回(京都大学)JINSHA
 - 2019.9 第7回(京都大学)JINSHA 🔵
 - 2020. 第6回(北海道大学)人社主導の学際研究をプロジェクト創出を目指して ー未来社会を拓く人文学・社会科学研究の現在と展望

研究評価に関する人社系フォーラムの開催

人文・社会科学系研究推進フォーラム 第4回「人文・社会科学系研究の未来像を描く—研究の発展につながる評価とは」(2018.3)

人社系の評価に関する日本学術会議、大学改革支援・学位授与機構の取り組み、人社系研究の 状況などについて知り、討論する場を設定

抽出された論点

- ・人社系研究評価の困難さや手法の是非
- ・個人評価と組織評価のズレ
- ・欧米(英語)が席巻する学術界の潮流とアジア諸国の現状
- ・若手研究者支援の重要性
- ・研究者と教育者の役割分担
- ・研究型国立大学と私立大学や地方国立大学との間の不均衡
- ・人文系学術書の出版事情



第4回人社系フォーラム登壇者 (2018.3)



フォーラムプログラム https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/111/フォーラム開催報告 https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/act/337/フォーラム報告書 https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/236470

フォーラムでの議論を経て

学術の動向(2018年10月号)特集

「人文・社会科学系研究の未来像を描く―研究の発展につながる評価とは― 」

特集の趣旨(京都大学副プロボスト・文学研究科教授 出口康夫)より抜粋

学問の評価を巡る問題は以下の二つに集約できることがわかる。

一つは「内実を異にする学問領域ごとに、それにふさわしい評価のあり方をいかにテーラーメードするか」という問題である。その一環として、理系学問をモデルとして組み上げられた評価基準によって過小評価される傾向にある人社系学問が、その独自の評価システムをいかに構築するかという問題がある。

もう一つは「資源配分の指標としての評価と、学知の質の向上手段としての評価をいかにして一致させるか」という問題である。資源配分の指標としての評価基準が、学知の質の担保に結びつかない場合、学問現場に評価システムが浸透することでかえって学問が滅びるという悲喜劇が生じてしまうのである。



研究評価に関するJINSHA情報共有会の開催

・第6回「研究の発展につながる評価とは一研究評価の未来を洞察する」 レクチャー&WS開催(2019.7)

WSから抽出された論点

- ・人社系分野の研究評価における多面的かつ多様性の ある評価の確保の必要性
- ・分野ごとの評価基準の総覧の必要性
- ・若手研究者の成長を促す評価の必要性
- ・データベース整備の必要性



プログラム https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/165/ 開催報告・資料 https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/act/621/

・第7回「研究の発展につながる評価とは―『責任ある研究評価・測定』と URAにできること」セッション開催(2019.9)

英国のURAとともに研究評価に関する欧米での議論の現況を紹介。欧米の議論の一端をもとに、日本の大学、そして研究支援者が、この課題に対してどのような貢献ができるのかを考える機会を設定。



開催報告・資料 https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/act/613/

海外での情報収集・ネットワーク形成

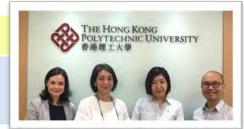
■RESSH (Research Evaluation for Social Science and Humanities) (2017.7)

EUの助成を受けた「人社系研究評価のためのヨーロッパネットワーク」の第2回研究会で、日本の研究評価について発表するとともに、欧州の多言語社会における人社系研究評価の課題について、情報収集。



■シンガポール、香港における研究評価調査(2018.5,7)

シンガポール国立大学、香港理工大学・香港城市大学・香港大学において、 人社系研究を含む研究評価の現状と課題について、情報収集。



■ EARMA (European Association for Research Managers and Administrators) (2019.3)

欧州の研究支援者団体EARMA第25回年次大会で、人社系研究と社会との関係についてのセッションを企画・パネル参加し、社会課題解決にむけた人文社会学の役割について議論。





INORMS(研究マネジメント関連国際ネットワーク)2020大会では、培ったネットワークを活かし、欧州、アジアの研究支援専門職とともに、責任ある評価・測定指標(Responsible Metrics)と多言語主義についてのセッションを企画('Responsible Metrics and Multilingualism: A review of evolving Asian perspectives')(2021年5月に開催延期)

国際社会における研究評価の動向紹介

- 2019年12月19日の分科会で、欧米における研究評価 の動向を紹介。
- 研究評価がすでに研究活動のシステムの一部となっている欧米では、数値指標に過度に依存した評価制度の弊害が指摘されており、主に計量書誌学に基づいた定量的研究評価手法を問い直す議論が成熟している。
- とりわけ、学会などの研究者コミュニティ、資金配分機関、研究機関などが、提言や声明といった形で研究評価のあるべき姿を示すと同時に、資金配分機関などを巻き込む、ムーブメントを起こしていることに注目。そのうち中心的な3つを紹介。



明確な言語で合意された「原則」の重要性

① 研究評価に関するサンフランシスコ宣言(DORA) (2012年)

ジャーナル・インパクト・ファクター(JIF)の限界を指摘。掲載されている雑誌名ではなく、その論文の科学的内容こそを評価、また、多様な研究成果物の価値とインパクトを評価するよう勧告。



② ライデン声明(2015年)

定量的評価は定性的評価の支援的に利用、 英語以外の言語による優れた地域的研究の 保護、分野による引用慣行の違いへの配慮 など10の原則を提唱。



③ メトリック・タイド(指標の潮流)報告書(2015年)

Research Excellence Framework (REF)のピアレビューとの比較から、指標の効用も認めつつそれだけに依存することの危険性を指摘。結論に代えて、頑健性、謙虚さ、透明性など5つの原則からなるResponsible Metricsという概念を提唱。



研究評価に関するサンフランシスコ宣言(DORA)



- 研究者や学会、出版社などからなるDORA運営委員会は、 2018年、英国の民間財団大手、ウェルカム財団、PLOSな どの支援により常勤スタッフを配置するなど組織を強化。
- この再起動により署名者は増加傾向にあり、影響力のある 大学、団体の署名動向が注目を集めている。
- 2020年8月20日現在の署名数は2015機関、16,331個人 (日本の大学による署名はまだない)。
- 充実したネットワークとリソースで、研究評価における数値指標への過度の依存を見直す運動のハブ的存在に。



- 2019年7月 ケンブリッジ大学・ケンブリッジ大学出版会 学内の若手研究者からの声を受け、大学出版会とともに署名
- **2020年5月 シュプリンガー・ネイチャー社** 学術出版社では最大規模、出版社に課せられた5原則の遵守を明言

nature asia

@ nature.co

シュプリンガー・ネイチャーは、ジャーナルポートフォリオ 全体において、インパクトファクターを研究評価の唯一の数 量的指標することから脱却するための取り組みを拡大しま す

■ 2020年7月 メルボルン大学

豪州大学初。導入に際しワーキンググループを形成、雇用契約の見直 しを含め、雇用、昇進における業績評価指標を見直す。

「多くの教職員が、成功の尺度としてピアによる査読 と査定を、ジャーナルベースの指標と均等に認めるよう望んでいることは明らか。」

Prof. Justin Zobel, University of Melbourne.

研究評価の議論における原則の意義

明確な言語で 合意された原則が ないと・・・

<堂々巡り>

今ある最善の 指標を研究 コミュニティ から提示 すべき

そう言っている 間にトップ ダウンで指標 が押し付けら れ、既成事実 化してしまう

いったん指標 を作ったら、 それ自体が 目的化して しまう

どんな指標も 提示せずピア レビューを貫く のがベスト

研究評価の議論における原則の意義

明確な言語で 合意された原則が あると・・・

→ <mark>具体的な</mark> アクションを促す 今ある最善の 指標を研究 コミュニティ から提示 すべき

分野による 引用慣行の違いへ の留意、データの 文脈を説明 <LM>

そう言っている 間にトップ ダウンで指標 が押し付けられ、既成事実 化してしまう データの**透明性** 向上、被評価者 が検証できるよ うオープンに <DR,LM,RM>

いったん指標 を作ったら、 それ自体が 目的化して しまう

定性的評定の支援としての指標の位置づけ「支援するものでありそれに**代わるものではない**」

どんな指標も 提示せずピア レビューを貫く のがベスト 指標のシステム 全体への効果 (影響)を認識し、 定期的に**見直す** べき<LM, RM>

> DR:DORA, LM:ライデン声明, RM:責任ある指標

KYOTO UNIVERSITY